

Clinical Question 3

大腿骨寛骨臼インピンジメント (FAI) により股関節鏡視下手術を受けた患者に対して、理学療法 (関節可動域運動, 伸張運動, 筋力維持・増強運動, 姿勢改善運動, 基本動作・歩行練習, 関節・神経モビライゼーション, 温熱療法, 寒冷療法, 水中運動) は推奨されるか。

ステートメント

術後早期の疼痛および日常生活動作に対して一定程度の効果を期待できるため、患者の個別性に応じた介入を徒手療法, ストレッチング, 筋力増強運動を含めて行うことを提案する。

□作成班合意率 100 %

解説

◇CQの背景

近年 FAI に対する関節鏡下手術後の理学療法に関する報告が散見されるようになった。今回は手術後における理学療法の選択として何が最適なのかについて検討した。

◇エビデンスの評価

FAI の介入研究のシステマティックレビュー (SR) は、2 次スクリーニングを 14 の論文に対して行い、2 編の論文がメタアナリシスの候補として残った。2 編中 1 編は、理学療法の効果をアウトカムとしない医療経済に関する論文であったため、最終的に 1 編のみを対象としメタアナリシスは行わなかった。Bennell KL, et al¹⁾ の報告のみが採用となったものの、サンプルサイズが小さく CQ3 の推奨の強さとしては弱い。したがって、ステートメントとして以下に CQ3 の解説を記述する。

Bennell KL¹⁾ は、FAI の術後の理学療法介入として、3 か月間の徒手療法 (トリガーポイントマッサージおよび、腰椎モビライゼーション)、ストレッチング、筋力増強運動を行うことで、疼痛および日常生活動作の改善が期待でき、6 か月が経過すると効果が期待できないと報告した。本研究は RCT ではあるものの、サンプルサイズが不足し、統計手法に耐えられない点に加えて、アドヒアランス率が低く十分な追跡が行えていないため、パイロット研究に相当する内容である。また、アウトカムとして iHOT と The Copenhagen Hip and Groin Outcome Score (HAGOS) を用いて、疼痛と日常生活動作を評価しているが、複合的な介入による結果であるため、どの介入もしくは組み合わせが効果的であったかを判断することは困難である。以上から本論文のバイアスリスクとデザイン上の限界を考慮して、エビデンスの強さは C (弱) とした。

FAI の術後理学療法の効果に関する研究は少ない上、質の高い研究がない。そのため、術後に推奨できる介入方法は現在のところ存在しない。今後はより大規模なサンプルサイズで、介入期間や介入方法を厳密に規定して検証する必要がある。また、断続的ではなく継続的に経過を追った研究を実施し、理学療法の効果を確かめていく必要がある。

◇益と害のバランス評価

術後早期の理学療法の効果は疼痛や日常生活動作について、Bennell KL, et al¹⁾ の報告から一定程度期待できるため、患者の個別性に応じた介入を徒手療法, ストレッチング, 筋力増強運動を含めて行うことを提案することは患者にとって益になると考える。

害については、FAI の術後理学療法の効果について確固とした基準は存在しない。しかし、あくまで

整形外科術後の一般的な理学療法の範疇であれば、手術侵襲部位についての安静度を主治医と確認しながら実施すれば、害は限定的であると考えらる。

◇患者の価値観・希望

股関節疾患に対して、FAI に対する手術療法の実施数は現状で多くないため、それに対する理学療法の経験の蓄積もまだ十分とは言えない。患者にとっては既にエビデンスの蓄積されている疾患と異なるため、患者の個別性を十分に配慮して、患者の術後の目標が過大・過小にならないように十分に配慮する必要がある。

◇コストの評価

術後の早期離床や安静期間の短縮は“early mobilization”として外科手術後に一般的に推奨されている。FAI に対しての術後理学療法効果の報告は少ないものの、入院中の理学療法介入には十分な医療経済効果があると判断できる。一方、術後 3 か月以降の介入についての対費用効果は低い。

◇引用文献

- 1) Bennell KL, Spiers L, Takla A, et al. Efficacy of adding a physiotherapy rehabilitation programme to arthroscopic management of femoroacetabular impingement syndrome: a randomised controlled trial (FAIR). *BMJ Open*. 2017;7(6):e014658. Published 2017 Jun 23. doi:10.1136/bmjopen-2016-014658